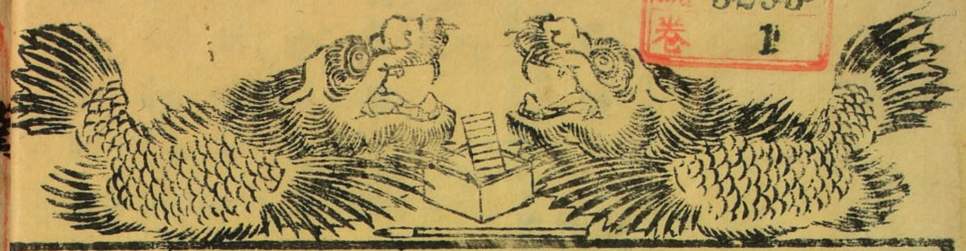
# 小栗外傳

ハ 13
3293
1

ヘ13
3293
巻 1



# 小栗外傳

絳山翁戲編
北辰政重

大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部

僕ら家の藩主なる義江忠信なる人は、ものの人となり、教ゆるに
古き物語りなどをもとより、僕も幼稚
なるさまに物語りなどせしき一日小栗助重なるものを拾ひ
出るに其事いと情ふかく、ゆゑ、ものの記録書注書
きなどを招反古にもよく取捨選擇せしきくを
今年書肆宴星閣のひらくこしを関く梓に彫んとて、僕
のいふ前に小栗実記なる書ありしを、藩主の
世にあらんと導人をあにとなどとまど鄙びあるいふ云

詰屋とそゞろに書けはなはだいとしと公よせんて
の隣翁の鬼和尚とあつく僕と責行の辞あるむや
書肆ら笑ひて我國唐國の古き事もろもろはうも
ゞ多きことなれども見たへ程ど元とむきよりて多くハ
ひがことなれと賢き人ハ宣へ是ハ蔓多はるくよ耳
ちくしたる事唐國の賢き代ハ周礼の風俗さ事
なるとも志ゝ見ゝ此乃ことはに志ゝ人と稗官よ
余て小説ときくしたる人へ是今は書も彼小説よ亜色き

もれと牧ハ世ハ必教乃多をけ乃きよくをあるす
漢翁の鬼とをを加ハ長ふとをあるとを
いそ恨とをらせとをもるに辞心亜多
ゆ加ををねよ書肆ら如をはなりぬ

文化十餐酉正月

鋒山人歡鱗蒔頁

藤登小太郎為久
後藤兵助 助高

田邊平八郎長為
田邊平八郎 長秀
栗判官代助重
頼天姫

風間二郎正貞
風間八郎正国
河内加太郎春教
池辺司助長
後藤大八郎高次
斤岡加次郎春高

# 小栗外傳前編目録


○巻之一

第一編　燈下鬼と談じて地所を看る
雨中怪を探して老翁に遭ふ

第二編　西士堂を毀て神霊を走らす
二家仏に因て奇児を産む

○巻之二

第三編　鵤鳩を射て小年婚を約す
鮎魚を網して勇士命を落す

第四編　横山依計と一色に謀る
結城実事を家板に録す

○巻之三

第五編　藤代川に小栗良郷を得る
桑波山に風間明主に遭ふ

第六編　孝子耕田に孝義を表す
勇士山猟して邪悪を除く

○巻之四

第七編　三傑山猟して両害を退す
妻婦譏毀して孝子を逐ふ

第八編　西雄市に得て因縁全し
一老城に死して後邪謗表

○巻之五

第九編　貞婦夫婚を待て節を全ち良馬名士に遭ふて能を顯す

○巻之六

第十編　舞妓哥を唄ふて蜜計を諭す

第十一編　老僧因を説て未前を示す

妬婦欲を逞ふして二娘を病ま

義婦身を殺して女主を救ふ

以上十一編前編六巻

小栗外傳目録終

# 寒燈夜話　小栗外傳巻之一

東都　絳山獸醜陳人戲編

## 第一編

### 燈下鬼を談して地雁を省る　雨中怪を探して老翁に遭ふ

豆利弓氏公元弘の功によりて。衛門昇進。従二位の参議に補任し。征夷大将軍の宣旨を蒙り。関八州を管領し。相州鎌倉に居たりしが。后一族新田義貞と確執のことありしに。夫れより天下二つに分れ。軍文に止附なしこれにおいて尊氏公は。嫡男義詮公と共に北朝の帝紙守護のゝ元上洛あり。此二男基氏公にして。鎌倉に止て関東と称せしき。基氏公性質賢戈きゝく。武と肉はしれと外に行ひまた行に東国の諸侍其徳に伏し。関東諸侯溢に治りぬされば足より。基氏公の御後代に鎌倉の主

とハなり給ふ。基氏公より三代ハ。左兵衛佐満兼公とやし。此公十八歳ふして
箕の裘と嗣まひられど。父祖の徳と牧率家扶一家の忠ふよりて。其職ハ保ト
まひられ。満兼公いまだ年幼ふおはすれば。平生あどなたに戯のこと多くふ
一色式部少輔詮秀といふものあり。これハ足利累世の臣なるゆ。近習の頭人
ふてあり。此詮秀ハ為人奸侫邪智にして。飽まで貪欲ふく。賢を妬み愚を
湧て。不仁不義の行のこと多し。されど近臣の恐ふるをりて。其威を懼れ。その
非を咎ふるものもなし。小人のうらふし。詮秀ものれハ権威ふおこり。我も足利家
譜代の臣なるゆ。家扶の人々ふ及ばぬ驕て居ることと無念の事こゝ思ふ
執るひとなくんのをと。只顧満兼公ふ媚阿祈ふふれて。家扶を初ものれハ
憎る人々を漸言ふ。君臣の間を疎うふせんとぞとりける。然るふ今年應永六
年なりけるが。夏の頃よりして。満倉中夜く光物飛行とるよし。口順しる。ひ



季秋の上旬ハくこゝちもぐきさる森西ふ鎮倉大義が谷の汚所
ふ入変順満兼公ハ徒然ふ堪ずゆ近臣の輩と揚巴なんぞの
ハ戯ふ。白盈ハはぎれふ人ども。夜のなぐさふ入いとく侘しくそもゝし
ける。一夜一色詮秀當直なりしゆ君の御光景を着。ふる射ふ。怪
昔物語しそハ伽ちゝ入せんりのことを。そらことまぐれ申ハ
る悲しゝ物語るふ。おもゝ夜ハ更ふる。此時ハ座の上ふさゝ物音して
ハ縁の障子明らるふ入うるが。怒ち暗くなりて。すゝ音もは。君
ちゝ見人々怪しめば。詮秀ハ申くるこの怪異を
知りまゝぞや。これハ近日人の風声なる光物也。十訳音が谷と。佐く
女が谷の間より生ると。ちれどもさゝ形なるとも知るりのゆ。今この怪物の
実否をこそ極むるのあゝ。天晴剛者ども。人々いかゝ。ぞとゝ剛

さるものハ。詮秀が志ざりがほするを悪を聴されものハ先剣よりの怪談なれ
せきく人に只今目前光物をとゞめしなれど心おくれくありけれども是誰ありて詮秀
が詞を回意なりのほし。詮秀己が云かけられてその回意りのなれなれ。志さけ
ありて面目を失ひしかば。満兼公ニ對ひて申けるハ。先祖頼光公乃
御時一殺の御伽ニ羅生門に鬼住よし申者ありしが。渡辺の綱に命せて
鬼神を討しめられしきされば今の世の童子までその勲功のあるかたり
伝へて賞しハ。君ハ正しくその御子孫ニてそうらへ世にふ。猶東関八州
ニ奥羽までも管領しまへが。頼光公よりハ位も富も遥に増りておわし
ますが。なんぞかならず妖物を恐れ給ふぞ。人なれバ。いかに後世なりとて
到底ぞ武勇ハ劣るべきと浅猿しくぞ思ふなると。御心のうちぞき事ぞ申なり。
御若年の満兼公ハ気もなく変ぜず御至極せり。我不肖なりといへ

ども。箕裘の業を嗣ひで関東の受領たり。其在住する鎌倉ニ妖怪
あるを武威なきニ似たり。斯てハいかで八州を制するニ任へん。誰かある急ぎ
佐々女が谷ニ走向ひ。妖怪の実否を見届まゐらせよと宣ふ御詞の下より。
某今の仰承らんやといふものあり。諸人誰なるらんと見るニ総角なる
美麗少年ハ御座の側よりすゝみ出たり。是ハ下野国結城の城主七郎左衛門
氏朝が嫡子。六郎持朝といふ者なり。満兼公かぎりなく喜ばせ給ひ汝よくも
申たりけるものかな。さらバとく彼所ニ赴けと命ぜらるゝ。持朝仰せ承けて
さりながら佐々女が谷ニ参りしても。妖怪ありやなしや空しく帰り
なバ人ニ後日彼是と人の申さんも無念なり。何まれ物賜りて彼所ニ止
置れ。まねく後ニなしと申さしてこそ実道理なりと。さらばこれを證ニ
せよとて持たる扇を賜はりけれバ。持朝喜び小臣古の綱に似たるべく

あらねど。此扇こそ古の金札にてあるらんと勇をなして御前を退出。日頃
飼馴し馬にうち乗り侍をも連ず只一人佐々女が谷へと急ける。頃は季秋
初旬なりしに夜も更闌しときなれば天に月の光なく。雨さへいたくふり出く。
咫尺も弁ぬ黒夜を。松明を照して路次の草踏わけつゝたどり行き駒の
手綱をかひくれば。轡虫さへ音をかなし。薄尾花をおしわけ。辛ふして漸
ふ佐々女が谷ふ到れば。馬より下て四方を徘徊ども。それぞともおぼしきもの絶
えなりしかば。さては根なしことを云ふなるぞ。さるにても紛りし扇ぞ。何方ふ
止めあんと四方を回顧に。そふ軒傾き柱ゆがみたる堂あり。これなん縁處
こさめれと其堂ふ入松明を照してよく見るに圓通といふ額ありこれを讀る
と安置する堂ふこそと思ひて扇を仏壇の前に居ゑ。額着して祈るは某君の
命なり。此地に妖怪ありとて届ん為まかりたるに。些の怪異をも見ず。斯ては
君に申へあぐべき詞なし。此地方ふ妖怪あるとは実事ならば。縦が身へ
我にみえさせしまへと志ばらく念じ居られども。さらに怪異なし。此地方は鎌倉
の中なれども片山陰の邊地にて。古樹生茂て鬼穴を穿ち。狐狸の
棲なる外人跡絶たる所なるに。時に三更の比及にて。風雨梢を鳴すのみ
寂として物音なし。尋常のものなりせば。いかで此處へ来るべき。持朝年
わかにて冠せるに至らざれども。天性の勇あれば少しも恐懼せず。前刻より只
一人観音堂にて居て只顧怪異に遭んことを念じけまで。絶て物は
見ざれば。君にもさこそ待るびあらん。いざや。還らんとて。轡をとりて伴
馬牽よし既に乗らんとせる時に。忽然として八十ばかりとおぼしき翁の
右に黎の杖を携へ。左に水晶の数珠をつまぐり。観音堂の前に現れ出
來り。持朝これを見るよりさてこそ妖物ござれと。雀躍して討んと

結城持朝


神翁
佐々女谷持朝
神翁に遭ふ

さてみようじゃ。さて去じ此翁り大頭あって。詰ふまる者ふもあらば不便のるなり。人々鬼々てゐこそ。やと。翁ぶ側近く近て寄れば。翁完ふ

とゝて云へりゐ。此ハ足下ハまぐ総角の子どりて。深夜ふあうじ此幽隠の地ふ。おとりおとゝ。ゆゝ勇まゝちよ。そもいうゐる人ゆてうゝせ

ゐふとゐりさゐふ。扨朝ハ彼どこそ問んと。そひきや。我子のうゝと問ゞこゝハ

と。咲きゐぐら。某ハ今夜君の命と稟て。此地方ふ来りゐ翁ふ遭こゝて幸なれ。近頃此地方ふ妖怪出るよ。其ゆへ知るゐあらば

語りゆゝと。云へりければ。翁ぶどうちふり。此霊塲ふおゐて。いうで妖怪乃出ぐきや。足下ハ此説者の履歴と知ぐでおわさん。そもゝ此観世音ハ

當初後光嚴院の御時延文四年。新田左兵衛佐義貞武州矢口の津ふ

おゐて。牛沢監物の子ふ討ぶ。其霊東国ふ祟り。夫れ怪異ゐり



けるゐふ。遍念管領の鼓ふおゐて。夜毎深夜ふ及び。厨の内ふ人集り

語り笑ふ。既ふして灯燈を挑げ。饌を調人食と具ゝ飲食の音ゆゝ。番士

の等怪ゐて厨の戸を開き視るふ。さゝふ人氣ゐ。戸を閉ぬれば又元の

ごとゝ人の声ゆゝ。これ窮怪録ふ載せ嵐の怪ゐり。それのこゐふに。

遍念中の寺社。故なくして拳表ゆゝ。堂倒ゐゝと少ゐゝ。或ハ白日

空中ふ矢叫びの音ゆゝ。黒夜街上ふ童謡の声ゐり。其外さゐゐ

の怪異ゐりて。人民安さゐゐ。関東一圓ふ瘟疫さゐ

ふ流行。死亡さるゐ多ゝ。ゆゝ。ゐおゐて基氏公これを患ひ。刑罰を

緩ぐ。税賦を減ふて大赦を行ひ。尚東國の宮観寺院ふ命せて。霊法

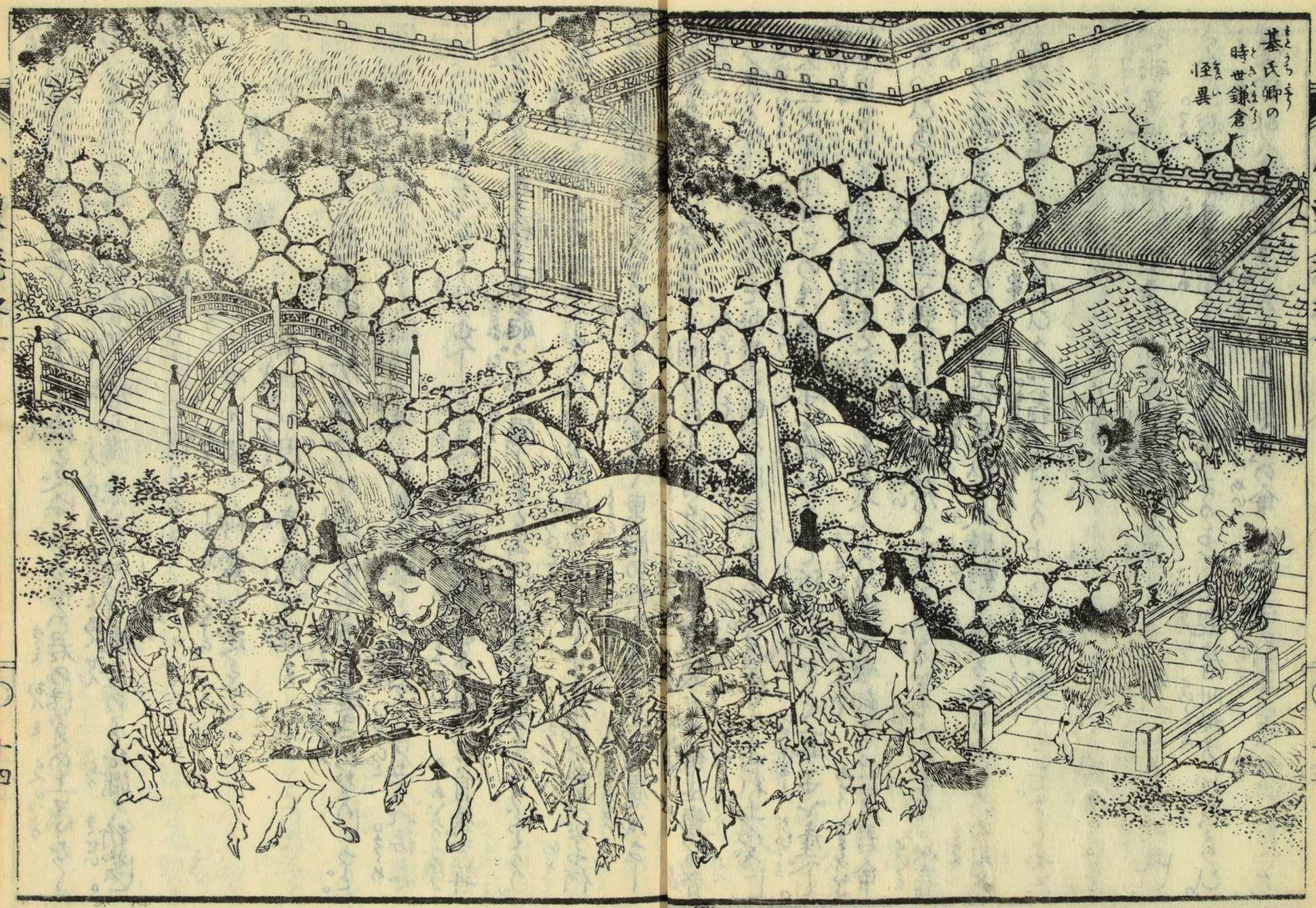
秘法を修せゝれゐゐ。さらふ天災地夭止さゐゐ。其頃相州藤沢山

清浄寺光院清浄寺の住侶。渡船上人と云へ。岡山一遍上人より八世ふ

當りし。拾行上人なりしが。道徳いとそなはりしうば。基氏公孰るの家板憲顕と議り。渡私上人と清し。天災を禳べき修法をなすべれば。上人民の嘆に。基氏公の民を憐む志厚の行を感じ。一七日の間秘法を修し。自ら十一面観音の像を彫刻し。是の義無と。十人の従臣と。十一の霊を結ん為なり。彩くその旨像成。此佐々女が谷に安置せしうば。疫病は止。瘟疫は止。瘟疫の中の怪異も。あとかたもなくなりぬる。其後藻魚の静謐に治り。今は疫病ふ至るまで。連綿として其識を安んぜり。足ひとつふ。此十一面観音の冥助ふよるものなるべし。然るふ今年満兼公の家督あって。世を新ふなりぬ。されば天運も革ふ行れ。多くは邪氣動り。よりて此観音菩薩。其妖魔鬼の氣を驅るべしと。夜毎遥参中と。孤行しるべし。爰に妖怪などの来ふ行ふ

ひとつぼといとなるべくもく物語されば。拾胡をもって。此十一面観音と此地に安置されば。縁故を知り。この翁凡人もあり。じとりひとつふ尚此後の世の光景と関人と。れを恭して云へり。不図も翁の示しのあるより。此観音菩薩のこと。安堂なる縁故と。霊験の著しを知るべし。翁の此光景ふ足まわるふ。凡人とふ思ひそべ。通力自在の神仙なるやあらんと。某ふ足利累代の臣なり。頑くふ此後遥倉のなりゆきを吉凶いかんやらん。此上の恵ふ示しの人と。慇懃ふ問へれど。翁へ双眼を閉じ一言は回答し。持胡尚辞と鄙なりして。再三乞ひ行あれど。翁漸く眼を開き。舒ふ云へ。行ふ行ふ。この事天機ふして。漏らすべからざるふ。仏の弟勝さふ。其大恩を浴りやさん足下の御ど。足下が忠信ぶ。ふ仏の弟勝さふ。其大恩を浴りやさん足下の今夜こゝに来るも。偶臣は君を勧るふ。されば遅りて今宵は来ぬと。君ふ対へあげるべし。平府必定彼偶臣此観音堂と彼却せんと欲

勧めてこそ。君許容あつて十日ところ此堂を毀ちなん。再び射ん先年渡船上人の封じ給ふ竜。新田義貞主従の霊再び世の間ふ出ずん。然るとも曰く仏縁ふ因らねば。最期の悪念ハ失て世の累とハなるべからざるこそあれ此人く。元英雄の輩なれば。生と変ても。世ふあるほどの豪傑となり。名を天下ふ現ずべし。そハ夫ふて止ぶられど。此観世音一回此地方を去らんば。鎌倉應濃の因縁絶て。これより東国大ふ乱るべし。これ是天の命なれば。奈何ぞも除さべき。よしや侯臣ども。君を勧めて。この堂を破却せざるとも。観音此地方ふ現ずいかで人間の力とりて止ん。足世ふ漏さべきにあらねば。よしく心ふ秘めて。人ふ語るべからざると念じ給ふ。持明今夜此地方ふ来る縁故ありて云あてられ。深く感激し。尚委しくと宸答ん。と仏教乗くあらねば。只今宣ふを。義興主従の霊ハ。何處ふ生れ出ずんと。問ひ給ふ翁近日此堂を毀てる命を禀る者二人あるべし。其一人こそ此堂を毀つ因縁ふよりて其家ふ生れ出づべし。又今一人こそ近日この地佛ふを授けん人と祈るべ。あるべ一女子を産べし。此女児こそ義興の再生と夫ぬるべ。又此堂を破却する二人君命とハいひながら佛堂を毀てる報あて。終ふ家をも身をも亡ぼすべし。此言妄ならねども往くその験ハ思ひ難し。時刻も移るふ。らしく。ふの処ふ去ふ。翁が身より十一の光明赫くとして。すぐあたりの人ける。忽ち一朶の白雲足下ふ生じ。漸くとして来りけ。る朝寧異の想ひをなし。さて此翁こそ正しく十一面観世音の化現しなるぞ。我ふ示すと示しまのなるべ。さるあても観音此地方ふ来るひ。世の間乱んとあるこそ。方見れ足天の命はしく。佛の力ならぬ及ぶかと。


基氏卿の
時世鎌倉
怪異

宜しければ。今いとやらうゆとも注さぐは。せめて君のほ身の上思なく
あくまのほーと再び釈音を伏拜と。満兼公のほ身安全のことを深く祈誓。
心裡さくふ樂まで。欝くとして還りぬる。

## 第二編

### 両士堂に毀て神霊を走る
### 二家佛に因て奇兒を産く

持朝。依くかが谷を生て所に還りける射かたや五更近きひろしうど。
満兼公に暇もかで。持朝を俟くびまくへ。直ぐふ門ふ戸おきへ佐く女
が谷の光景。さくくゆめゆめと宜へば。持朝後で翁に遭ける首尾を詳
あきへ上ク。ありれども翁が人に漏ーそと云ける事をば。まうさぐとく。
これ翁と恐ると秘めくあへあふぐ。満兼公のあくもゆめのごと何
ある不思議のことくと做くひ。あ東國の乱出まんと遠慮なく





その故なり。満兼公その光景をゆめ一色注秀と云て。持朝のことを知と
りて。命せゆめくひ。持朝を褒賞せんと宜ひ。又注秀は持朝の一人
功とうまと妬と嘲笑ひて云。まうさ英雄児の持朝いかで邪魔ちきめ妖怪
と問答をふ至ぐん。思ふ甲夜に廣言して参ける。事なくて前言
の面目なきに空言ともも計られぐ。翁に遭ーが定めぐ。狐狸の類の
化て騙ーたるめてひるの。斯は妖怪の出る式制をること能ねば足霊なき
庸佛なり。そのごとく仏のいくで。我身が悪霊とくなる。ちうあふん。
さる妖魔の地へ毎く彼却して除ぐされば。後いくある崇をあきんも知る
ぐふぐと。あぐくちくけ。持朝その滝をゆめて恵ぐく。既に
討果さんとまうしぐ。君のあ怒と憚りて怒式押へ心を静め熟くおりぬば。
翁の云ける佞臣とは。この注秀なきーてやらうらん。前言空ーからぐと。

深く感じかゝて観音堂全たこゝにのゝしざわれども堂亡びぬ東國乱れ
もんとありしこの猿く力の及んわざに止めてこんどやと。詮秀ふ對ふ。
我も武士なり。猶ふ君の側ふ侍りて。添ふ鴻恩に報ゆるこそ易かゝ絲。
赤絲をゆ。虚言とりて君を欺きたてまつる。佐く女が谷の記音堂は先祖
基氏公の安置せきーゆふくるゝと漫りふ破却せんと臣たるの道ふ我
若輩と笑んより。不知い誤と改め再び記音堂のことを云べゝふと道理
ゆえーてゆけれ詮秀これを笑より。顔を朱く成青くなり。大ふ怒り声と
厲ーて云ゝりけゝ足下年軽の身と。頭くゝる某よ對ひ言れの一言奇怪
なり我言を笑て怒ゆ場ごゝ武士のなゝひ。生場を去ふ。奈何とも做を
ごとと力とりてゝ叶ゝとと想ゝべこそ。さるぐの言を述く我汝辱しの是。

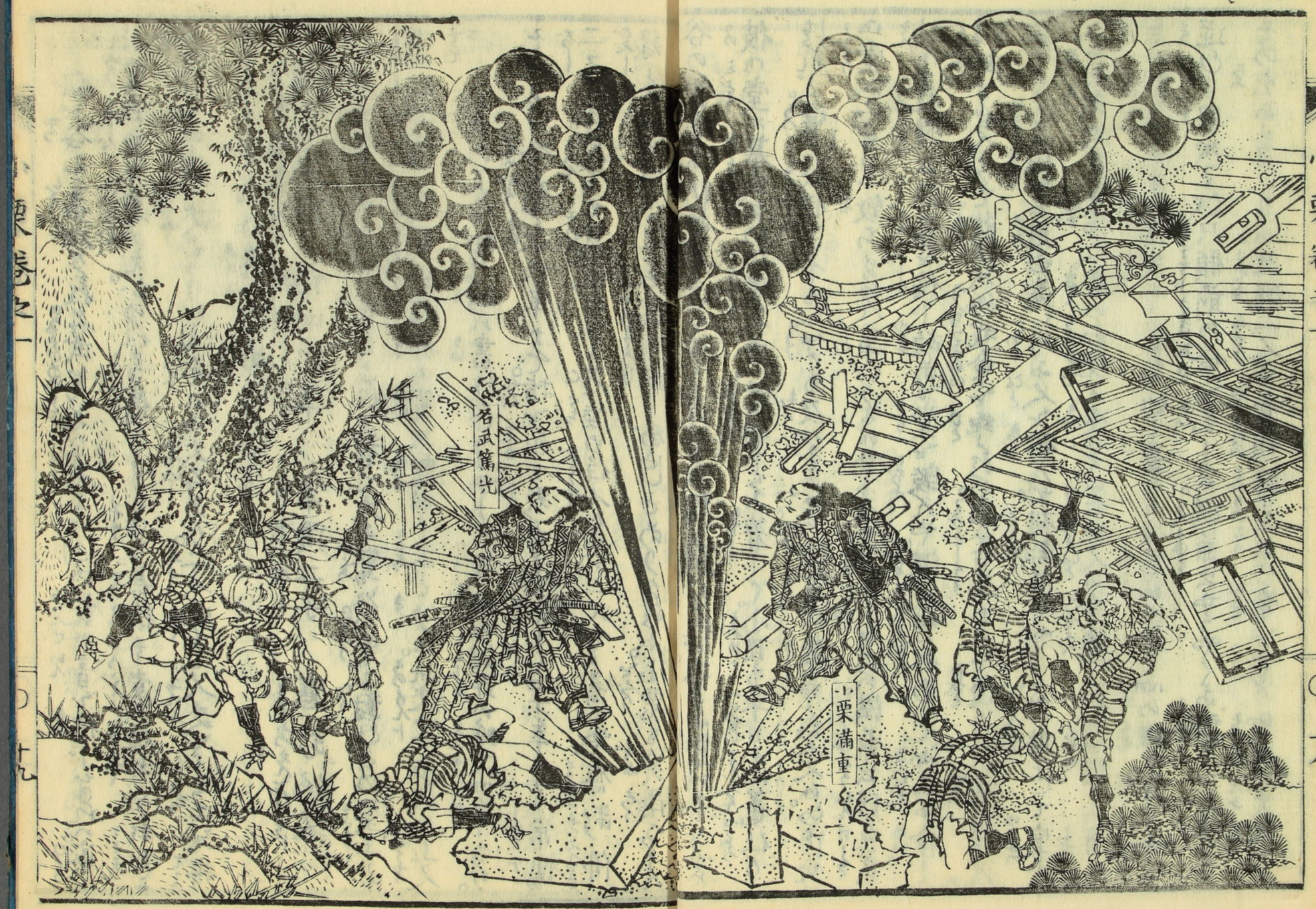
嗟臆病赤絲の白痴なるとめゝで罵り嘲るゝ。血氣の打却いうで怒氣
と忍ぶべき。彩色朱と灌ぎ変じ。忽然として声と励ー。膳病
赤絲の白痴ふ。無れの過言免さしと力の柄ふ手ゆかゝるゝ。詮秀も
膝ーて歩ー。力の嗤天さゆゆー。既ふ事ふ及んとそその射ゆ側ふ候ひる
人ゝ。慌忙急ゆ二人と居間。ゝ御前なり尾義なせそと。制するふ満兼
ゆも涙ともに二人ゝ勧解なゆゆ。互ふ心ゆ解されと君の命せの重
けれい。深ひいゝも友人へ辭ゝしてまうでなり。且説詮秀ゆ若輩の打却
ふ辱ゆられたることふゝ憂り。彼が云ゝふゝて記音堂をそのゝに
置ゝば我指威哀んとこれより妻ゝと巧言ふして。記音堂と彼却せん
ことを君ふ勧めゝり。満兼公ゆ年若ゝはゝせば。詮秀が言ふ惑ひ。
終ふ記音堂を毀ーゆんとゆば。執事家扶安房ゆ憲定ゆ召ーゝ。

前夜ちごぐのことありしと。絵秀怪絵を做析うに。光物は不の法を梅花なるけるふより。其生る処を紀さんゐる。結城朽胴と依く女ゐ谷ゐ坐ゐ〜ゐまふゐ。怪しき沼ゐ逢。ちごぐの事云ゆへけること。且絵秀持胴手ひのこと細ゐ丹命せ〜ゐひ。かほは妖魔の佛堂。そのまゝ置んは我武威のなれよ似られば。えゐく彼却して生妖と除くべと。命のひられば憲定怒るひてヤけ彩そ。君は知ゐ〜めさびや。佐く女ゐ谷の紀まる堂は當初祖父君基氏公鎌倉安全に祈の為。茂沢蓮行ちの波紙上人して仇敵の怨霊と結め封じまされゐ堂ゐり。さる縁故あるとちごりゐ毀ちのんと。然るべうもいるべ。熟〜思ふれゐ人じ。彩る命と業るも畢竟絵秀ゐよりなれ怪絵をなせ〜より発ゐ。其ゐ月に近習の侍人とじいべ足非と弁へざる。既よ怪力乱神と語べ。とふ教もあり。嗟乎ゐ〜ゐ色ゐふるゐ。一色ゐふるゐ。溪息されば。満兼公扶事の諫。さるとちごぐゐ。此事既ゐ世ゐ公みなれり。さる紙そのまゝに捨置べ。八州の人く。我不武と謾り。命と用ひざるゐ至ゐ。いゐみ羞頌の任ゐるべ。紀ゐ。我詮秀ゐ言と破て。祖父君の建立ゐひつる佛堂と。いゐて毀んや。たゞ管領の職に失ゐじと想ゐゐ故なり。尚足ゐて牧ゐ止るや不ゐと宣ゐ丹。憲定君絵秀ゐ言と信じゐ人ゐ。誅止るべゐ〜ゐは察し。此国の事ハさゝゐなれば。世の害ゐ丹ゐるまじと。終ゐ其命ゐ従ひ。うば。満兼公苦びゐひ。彼佛堂と毀んを行ハ。誰ゐよりゐんと商議ちゐゐ丹。小栗孫五郎満重。名武常陸介篤光こそ。然るべうんとて。さゐば召さべ〜と。両人と召されゐる。小栗孫五郎満重と父へゐ人。常陸國の住人ゐて其遠祖ハ葛示親王四代の孫。常陸大掾国香の子。小栗次郎ゐり八代の孫ゐ国重。常陸の國小栗村ゐ住ゐり。代く源家ゐ勲功ゐり。

孰中満重が父重躬。足利尊氏公に属して功あり。多くは庄園を給
はり。鎌倉の麾下に属せり。夫より今の満重箕裘
を嗣て。管領に仕ひること他事なし。又名武常陸介篤光と云へるハ是も
常陸國の住人にて。清和源氏の鹿流。新羅三郎義光の後裔なり。此二人
相共に心質直萬賢きのなり。されバ同氣相求むとて。伺候の侍妻
かる中にも。小栗と。名武とハいと親しく交ゝ。今日も名武篤光。小栗
満重がもとに来り。多くは物語してあり。君より俄の召有るに。
こハ何事やらんと不審ッ。二人うち連管領の所へ来りしに。法前に召
出され。君自ら宣ふハ。此頃佐く女が谷の観音堂に妖怪住て。人に
及ぶれば。汝ホ二人彼所に立越速に彼堂を破却し。妖物を驅拂へ
と。命含めらるゝ。名武篤光ハ年四十に近けれど。一子なきことを嘆く佐く女が



谷の観音に祈誓し。子を授くること願ふ折なれば。大きに驚き
彼の堂ハ基氏公の建立にて。霊験あらたに著し。小臣も平日篤く仕り
たれど。嘗て妖怪とこそもし。聞も及ばざれ。こハ流言の虚言とも思へ
堂をみだりに毀ちなんと。笑ひ上られば。満兼公法氣色
換て。我慢に流言を信じ故ある堂を毀んや。深き所存あつて。汝ホに命じ
破却させんとて。然ること乖戻ハ系若手なりと漫りての故なるべ
よく今ハ汝を用ひまじ。外に人を撰んで破却させんと。忿然として宜ふ
に。篤光大きに恐れ。君の仰既に変せり。若他人に命換られバ口惜き事
且ハ観音の霊験失ひなんぬ。いと畏こくも冥加なし。と心の裡に念じ命に
逆ひ罪なこと。只顧前の命と乞しこ。満兼公やうやくに聴こしめし。
その乞ふまゝしまふ且説二人を管領満重公の命と称り。即日人夫を催し




小栗満重
武篤光
上栗谷武
軍を奉して
佛堂を
毀ち
神霊を
走らす

佐々女ヶ谷ゐ急ぎ行くれ。名武篤光い素よりこの観世音を信じなれば。蜜ゐ小栗満重ゐ云ゆえ。おのれ彫る像をとり寄せ。其後堂を破却さ延ゐ堂の下に方一丈ばかりなる平めの大石あり。二人堂を壊さ人夫をして土を拂へ

ばーえるゐ。十六の真字を彫りけるゐ。

## 法室寓居　惟四十年　常陽二子　應對仏縁

とゆふ文字ばかり。名武篤光これを着て。大ゐ驚き小栗に對ひこの堂を

當初渡船上人新田義真の霊を鎮せ一ゐと伝ゐ此文字ゐ知ゐ上人

既ゐ今日のことを知り。知ゐ書はけるゐ。

これより今應永六年まで。指を屈て数ゐるゐ。正一ゐ四十年なり。常陽

二子とは。足下も某も。ゐもよ陸の住人なれば。二人がとゐるや。應對仏

縁とは。いかなることぞ。其仏解しがたしとあり。小栗も実甫ゐん。



これゐよりて是を思へば此石の下ゐこそ。我真等の霊を封ぜ一慮なる

ゐ一。既ゐ佛堂を破却一はれば。是則佛縁を断ぞるの語ゐあるべしと云ゐ。

名武大よさとり。四十年前今日我ら此堂を破却さるを知りよゐ。渡船

上人の神通感ぞるゐ堪きゐ。ゐて此石を除去ぞるけまと。人夫と励

ま一。彼石を扛去ゐ。ちらゐ其庭ゐ一箇の穴あり。深さ幾尋ゐると知り

がたしこれいかゐと篤光満重の二人立寄ゐ。穴の和と訳き窺ゐ。怪しび。

穴庭刮刺と響と和とし。一道の黒氣漆起。半天ゐのぼりしが忽ち空中

まで散一。十一の金光四方ゐ飛去失ゐゐ。是則新田義真ぞるゐ。十人

の従士れ霊今日出世一て。英雄小栗助重君ほとなり。美名を顕ぞるき

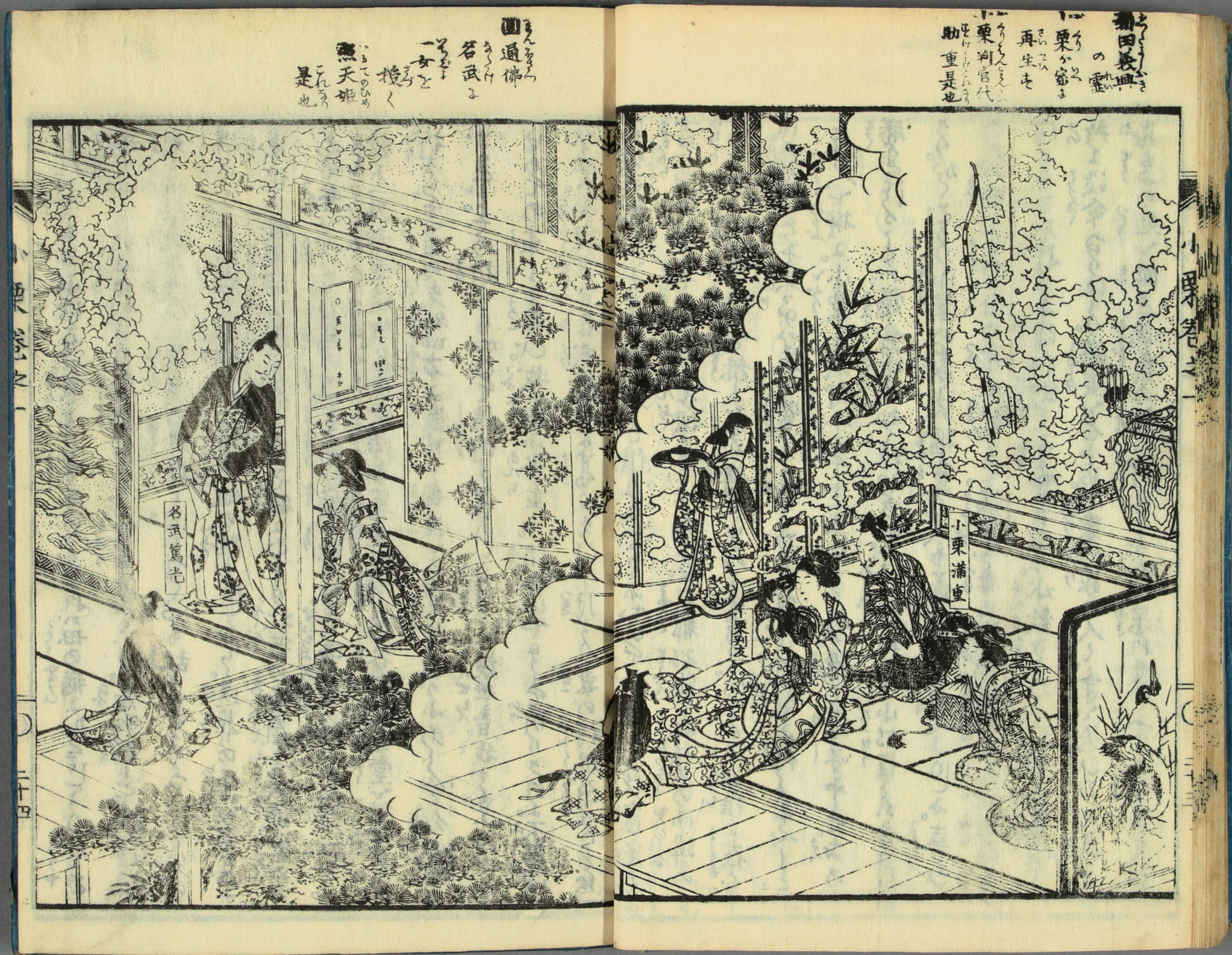
兆とゐ。后ゐ思ひ知ゐ。満重も篤光もかゐ不思議と日前ゐ着。

奇異のおもひゐ心酔ゐごとく。歩付ゐ居ゐしゐ。ゐても果ぞきゐあぶねば。

人夫ふ不知し。破却志たる堂の材木とゞ。積て一片の煙とし。まこと十六字城
彫し石板と車ふ牽し。管領のは所ふ送り。首尾の光景と洋ふ笑へ上く。
石板を君の乃塔ふ使くしふ。満兼公これと見給し。その物語ハ笑しめもふ。
寒由あり佛堂を破却さしたることの詮なしと。悔ものぼせども。既ニ事果
ぬれば。怎とも仕がなく。小栗。名武の旁と賞しまひられ。斯て后左兵衛佐
殿へ。此ハ例ふ。ひきとりおくして。法近習の外を使對面も仕。
其うちも一色詮秀。只顧ハ例ハ去ふ。折く人と退けハ蜜語とかるゞ。
維あり。生事と知るりのなし。去ふ年の十月。氣紫の大内左京
權太夫義弘逆心ハ如ハ。泉州境ふ楯籠る。土岐宮内少輔詮直義弘ふ
一味し。笑波国長森の城ふたて籠ハ。京都ハ軍ハ。こ石及ぶ。早く
征伐せどんハ。ゆしと大内ハ及人と自らハ播山ふ出陣ましく。夫くふ兵ハ
分ちて伐しまふ。幾程もなく義弘も詮直も亡び失ふ。是ハ大内義弘
將軍家と怨みをなりて。鎌倉殿と結ふ。此反逆ハ企ふ。一味
せし首尾ハ一色詮秀の謀とより出しそ。左兵衛佐満兼公と同年
十月。一万餘騎と卒しまひ鎌倉と打立ふ。外ふ京都ハ軍家の加勢と
被露しけれど。生実ハ土岐詮直ハ長森の城と後詰して。寄手と追散し。
其勢ひふ乗じ。往ふ京都ふ責登り。ハ軍ハ討なり。天下ハ傾くとの支度
なりしが。大内義弘も。土岐詮直も亡び失ふけりと。笑へ。左兵衛佐殿ハ
本国ふなりて。鎌倉ハ還りまゝ。武州の府中ふ逗留しまひ。この事
誰ふとなく。佐兵衛佐殿ハ謀反のす。只敵ハ国声笑へ。鎌倉の
執事。家扶憲直これハ怒ひ。内く海なりしふ。左兵衛佐殿も夢の醒る
ごとく。後悔ふ大ふ。京都ハ軍家ふハ鎌倉殿逆心

あらはし。きこし召及ばれけり。鎌倉殿京都に反くをあらんや。申しては天下の大乱ならん。穏便の旨こそ肝要なれと。多く評議ありて将軍家より鎌倉へは教書を下し。野州足利庄を賜りしかば。満兼公案に相違し大に喜び深く将軍家の恩を感謝し。翌年の三月武州府中に出て鎌倉を守りたまふ左兵衛佐満直公鎌倉の管領にて富貴とともに保ち何不足なき身にてかゝる企をなされしぞ。いと怪しくも不思議の事也。此後同年九月に奥州の宇都宮氏広謀反し。同き九年の春には奥州楯大膳大夫入道管領の命を叛き。新田義則鎌倉に寇を。此節八州のうち。新田の餘類乱を起し。盗賊蜂起なる事多かりしかど。或は討れ或は降参して鎌倉を傾るまでには至らざりしに。同じき十四年の八月九日の夜管領の御所回禄に及びければ。満兼公辛うじて御所を逃去出まひ。完戸の江入道の館に入まひぬ。かくれば君を始め。諸臣世をあやぶみ易き心もなかりける。元来正しく結城持朝に示しける翁が言葉に感じたり。不在語下且説小栗孫五郎満重は今年四十に近けれど一子さもなく赤頼なく想ひしに。應永六年の冬此頃より妻なりける初瀬。たゞならぬ身となりけるにぞ満重が喜び大かたならず。安産あらしめん神仏に祈しみ。其験ありや。同七年の夏の末いと安らけく玉のごとき男児を産りしかば。夫婦の喜びたぐひなく。掌中の玉掘の思ひと愛慈しみ。其名は小次郎とぞ呼よれり。此児成生に随ひて。顔貌清らかに心さかしく賢く。父母に孝心ふかし。幼よりよみ物かくとより弓ひき馬に跨り。太刀合の業に至るまで。手より優りて見えければ。父母のこころはさらにも云ず。一門他門の人々も賞讃せざるはなかりける。是佐々女が谷にて十一道の光物。四方に散乱せし其一つ生れ出しなり。此児後に小栗判官助重とて。英名を顕せし

豪傑なり。今年應永十六年。鎌倉の管領左兵衛佐滿兼公。夏のころ
より。御心地煩しとて。國家の政をきこしめさず只顧醫療をうけさせ給ひ
しが。その驗ありともなく色も衰へて日にそひて重らせ給ひしかば関八州
の大名諸侍。伺候の輩声をのんで高くせず。さしも賑ふ鎌倉中打ひそ
まりて易に心もなかりしに七月廿二日といふに。左兵衛佐殿終に逝去し
給ひぬ。御年わづかに三十五。勝光院殿とぞ諡し奉らせ給ふ。鎌倉
の歎きいふもさらなり。京都将軍家にても滿兼公の逝去を聞召し
て。愁ひおぼしめし。御悔の御使などありて其翌年十七日京都より
土岐右馬之允持益を御使とし。滿兼公の御子幸王殿とまうして今年
十二歳になりたまふを左馬頭に任じ。関東の管領相違あるまじき旨
御教書を下したまひぬ。執事家杉安房守憲定ともに八州の諸大名
安堵の思ひをなして。よろこぶこと限りなし。かくておのれ執事家杉憲定
吉日を撰び。幸王殿を元服させ。ゆのふ京都将軍義持公の偏諱の
一字を申請持氏公と称し奉り。傳きかしづきける。かくて御幼稚なる在
御側ちかくはべるにぞ太るなれど。賢く忠ある者をば御近習に付らるべしと
その人を撰む。小栗小次郎今年十七才なりけるが。かねて孝子にして才の
勝たることを。鎌倉中にかくれなければ。召出されて御小侍臣となりに
けり。かくぞ小栗の家には福重の人も羨むばかりに栄へけりしに。喜び
あれば悲しみ来る世の常の習ひとて満重が妻の初衛。修初に幼地煩ひ出
給ひて。日に添てよわりゆき。手をつくして水穀もすゝまず醫療験なく
終に没命なりにけり。満重をはじめ小栗一家の人々。妻を失ひ力落し
悲しみの翅を縮め遊魚の鰭を断るがごとく。呆れはてゝ嘆きけり。


新田義興の霊
小栗が家ま再生き
小栗判官代助重是也
小栗満重
小栗判官
通俗名武
名武一女を授く
熱天姫是也
名武篤光

それが中にも小次郎は原より孝子のことなれば母の病をかなしう思ひ
側を去らざる心のかぎり看病せしるゞ甚甲斐もなく永く別れをぼしたれば
天を叫び地を呼びて悲嘆の涙乾く間もなく心も乱るゝばかりなりしと父の
満を辱くに強め初濃の屍を茶毗の煙とぼしたり送葬の営をなすに
東伝の秋雨涙と綴り累くとして紬まめまり北芒の冬嵐音に添て凄しこと
悲と偽と白楊の下芝壌の庭に埋みて青塚一塊の土となるのみにて
放下一次却説這裡名武常陸介篤光へ依く女房谷村記書堂を破却せる
折ふし十二道の先物四方に散ぜし奇怪を看冥罰いかんと公儀ま
ざまどそのの折しも信仰なりし李翁の観世音我が身ふかしを
せあその事と喜び我家に安置し信心いやまして祈りそなへ不思議
なるかな此観世音名武の家に入りし月より妻の侍従懐妊せ



おぼえ々彩あれど夫婦原来観世音に子授祈願せしなれば感喜余
りなくこれうんまさしく汚佛の冥助空しかれば験ありと月の満ち
待ふ皆光陰易く其年も暮れ明る應永七年甲戌夏の末玉祇歌くどろを
なる女児を産り名付て小栗小次郎と生まれ月と同じ結城持朝に
告しに翁ど言ふに強めり名光夫婦は先や菩薩の授けのふなれ
ば我子なりとて疎まざるべと寵愛ることを譬へるに物に例ふ
美しく邊も照り赫くばかり好れがとて照天姫とぞ呼びなせり
生長に古の衣通姫小町なんども劣やあり
うんとおぼえるに才人勝れて女子れ為業としく形ぶるなく学
書読ことなんどに幼くに青書生よりも優れり父母は足や観世音
の化身なやあんどぞめとらく慈愛深きに付けても哀れなる

女婿もがなと想へど。鎌倉中ふこれぞとおもふ人もなれよ。近日通倉中あそ。
小栗小次郎が才貌のとぐれし代選めくりしうば。篤光ふとふとふ法げき。
折もあらば小栗満重ふふてこんぢやと妻あもそのよし代ゆえ知らぬよ。
こよなくよろこび。奴ふもか稼て。再想ひそぐりねとあらふ。あんとも甚仏あらば。
満重ふ遣なば。此事云出べしと。その時とそ行よろ。代ハ寛永十八年
の春なりしが。名武ゐる老が前栽ふ。名花の盛あり。いつも花の代ハ小栗と
まうひさと二春の行楽とまうしたるが。今年も既ふ甚とろふなりしが。招うぐや
と思ふ折ふ。小栗がもとより使ふてきたれハ。此程悪息ふその小次郎。
仏地悩まうくり篤アのひたるが。なまうふ心屈ぐ甚ぐ。鬱散の為ハ庭
の花一見さーまうくんハ免されば蒙ぐ。明日石倶ーゆさんと有るふ。
篤光仰まうけられ折ふ。こハよろ幸とかぎうまうくまうとび。新君乃
ハいろう夢だうも存ぜど。浮世ふ過ぎることいとかーこー。何の
苦ーくふうん。明日そくうハ山こうのうんと。いと慇懃ふ回應ぞうよ。使ハ
其こうぞ代ぐく急ひでこそハ罷りうる且

宮焼
狐話　小栗外傳卷之一畢